



日本万国博覧会の展示映像のアーカイブの契機となる 日本館上映フィルムの原版を発見！

概要

平成 25 年 5 月 27 日（月）、九州大学大学院芸術工学研究院の脇山真治教授らは、1970 年開催の日本万国博覧会の日本館で上映され、その後所在不明だった 8 面マルチ映像作品『日本と日本人』のフィルム原版を、東京都内にて発見しました。この作品は市川崑監督によるもので、富士山の四季とその山麓に生きる無名の人たちをとおして、日本と日本人のすがたと精神をとらえ、将来を見据えて描かれたものです。

博覧会等で上映される展示映像は、劇場映画とは異なり、会期終了後に保存する習慣も組織もありません。さらに撮影や上映に必要な様々なシステムも世界標準がないため、ほとんどが廃棄されています。そのため、貴重な映像原版も同時代の最新技術も、当時にさかのぼって調査することはたいへん困難を要します。展示映像を保存するためには、可能な限りそのシステム環境演出も保存しなくては意味がありません。このような「展示映像アーカイブ」は世界でも例がないため、このフィルム原版発見を、アーカイブを実現する契機にしたいと考えます。

背景

『日本と日本人』は 1970 年日本万国博覧会の日本政府出展「日本館」のために製作された映像で、監督：市川崑、脚本：谷川俊太郎、音楽：山本直純という最高のスタッフを擁しています。

上映形式は 8 面マルチ映像（縦 2 面×横 4 面）で総スクリーンサイズは高さ 16m×48m にもなり（図 1、2）、使用フィルムは 35mm ダブルフレーム（※1）で最新の国産映像技術を駆使したものでした（図 3）。

このフィルムは博覧会終了後に保存と管理の責任所在があいまいなまま時間が経過し、今日に至っては「一切残されていない」とされてきました（「国際フィルム・アーカイブ連盟東京会議 2007」での報告）。

万国博覧会で上映される展示映像には『日本と日本人』のようなマルチ映像、立体映像、全周映像、全天球映像、大型映像などさまざまな形式があります。仕様が多岐にわたり複雑なため、オリジナルを残すことはきわめて希です。展示映像は、映像デザイン、展示デザインの一翼を担うものですが、これらを保存することは、国際的にもほとんど手つかずの状態です。その時々最高のスタッフを擁して、先進的な技術とノウハウを結集して製作されながら、映画のような国際的な標準仕様がないため、記録・保存はおざなりです。これは映像デザイン研究のおおきな欠落分野となっています。



図 1) 日本館第 5 ホールの上映風景



図 2) 会場全景：模型

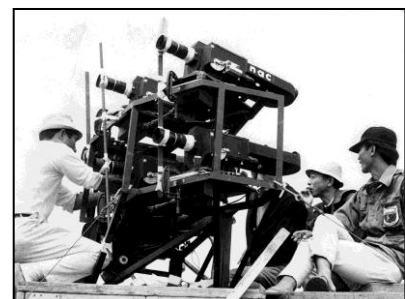


図 3) 8 台の 35mm ダブルフレームカメラ

内容

九州大学大学院芸術工学研究院の脇山真治教授は、『日本と日本人』のフィルム原版が残されていないという根拠自体が不明なため、原版の所在調査を開始し、平成 25 年 5 月 27 日（月）、(株)イマジカイメージワークスの小野雅史氏の立ち会いのもと、東京都内の民間倉庫において、『日本と日本人』のフィルム原版を発見し、日本万国博覧会終了後 43 年にして、その存在を確認しました（図 4、5）。

原版は 2,000 フィート缶に入っており、1 スクリーン当たり 3 ロールに分けて収納され、合計 24 缶あります。状態の詳細（カビや傷、退色等）は未確認ですが、巻き取り状態で目視確認した限りでは良好と思われます。残念ながら、この作品の音源の発見までには至っていません。

また、これに先立って(独)日本万国博覧会記念機構（大阪府吹田市）の文書資料室での調査にて、完成版「フィルムコンテ」の存在も明らかになりました。これは作品全編をポジフィルムの切りぬき構成によって 8 面を構成し、絵コンテ状に配置したもので、上映作品全体のストーリーの流れが把握できるものです（図 6）。



図 4) フィルム原版



図 5) 2,000 フィート缶で 24 缶



図 6) 「フィルムコンテ」より抜粋

■効果 ～『日本と日本人』のテーマと今日的な意義～

この作品は日本館の展示テーマをうけて、日本館の締めくくりとなるもので、「日本と日本人」の姿とその精神をとらえるため、日本のひとつの象徴ともいべき富士山と、その山麓における無名の人たちの生活をテーマとしています。富士山と向き合い富士山と闘いながら生きている母娘をとおして日本人の魂のふるさとを掘りおこして未来を見据えようとしています(上映時間 20 分)。

今日、富士山は世界遺産登録を目前に控え、富士山と日本人の精神性があらためて注目されています。日本の高度成長の一方で、すでにその命脈がこの『日本と日本人』にもあるとすれば、フィルム原版の発見は、1970 年当時の日本人と富士山との関わりを、世界に向けたメッセージとしてどのように発信したかを知る貴重な映像と思われる。

■今後の展開 ～展示映像のアーカイブをめざす～

博覧会のために制作された映像は、劇場映画と異なりほとんど残されていません。『日本と日本人』の発見は、今後「展示映像アーカイブ」へ発展させたいと考えます。これには権利関係はもとより、映像と環境演出や展示造形デザインなど、劇場映画にない多岐にわたる構成要素がありますので、記録・保存も単純ではありません。しかし、イベントの終了によって映像も消滅するという流れには、歯止めをかけなくてはなりません。

映像のアーカイブといえれば映画に注目が集まりますし、国の支援もそこに集中しています。しかし展示映像も貴重な映像文化遺産として、映画にならぶアーカイブを目指したいと考えています。今回のフィルム原版の発見によって、研究者はもちろんのこと、一般の方々にも「博覧会で上映された映像」に関心を持っていただき、世界に先駆けて産官学による展示映像アーカイブを実現したいと考えています。

■市民への公開方法

この『日本と日本人』の原版発見は、当時の展示映像の再現を可能にする第一歩となり得ます。すでに映写設備は廃棄され存在しませんので、デジタル化したのちに擬似的な上映になるでしょう。それでも日本で初めて開催された万国博覧会を代表する巨大な展示映像を再現上映することは、その技術と表現の先進性をひも解くと同時に、富士山とともに息づく同時代の日本と日本人の精神性を、今日の若い世代が知る上で貴重な機会となることが期待されます。全国巡回上映会が可能であれば、より多くの人々の関心も高まるでしょうし、縮小合成版ができれば、小劇場での上映もできるでしょう。

【用語解説】

(※1) 35mm ダブルフレーム

劇場映画で使われるフィルムと同様の 35mm 幅ですが、一コマの大きさが劇場映画の 2 倍あります。したがって拡大投影に対して高い解像度をたもてます。フィルムは横方向に送られます（劇場映画は縦方向です）。

(※2) マルチ映像

複数の映像を同時につかって上映するときの映像表現とシステムの総称です。『日本と日本人』はスクリーンが複数ありますのでマルチスクリーン映像ともいわれます。

■写真出典

図 1：『日本万国博覧会・日本館運営報告書』日本貿易振興会,昭和 46 年 1 月

図 2：『日本館』通商産業省版（出版年月不明）

図 3：(株)ナックイメージテクノロジー所蔵

図 4～図 6：脇山真治撮影

■追記

- (1) 上記の内容は平成 25 年 6 月 15 日開催の日本展示学会第 32 回研究大会にて発表予定です。
- (2) 本調査は平成 24 年～平成 26 年日本学術振興会（JSPS）科学研究費補助金「挑戦的萌芽研究」に採択され、支援を受けた「国際博覧会における展示映像の記録・保存に関する研究」に基づいて行っているものです。

【お問い合わせ】

九州大学大学院芸術工学研究院

教授 脇山 真治（わきやま しんじ）

電話・FAX：092-553-4515

Mail：wakiyama@design.kyushu-u.ac.jp